NPO法人
方丈庵竣工

森を再生する会会報

第１８号
平成20年8月1日
1st。Aug.,2008

ホームページをご覧下さい。 http://www.katch.ne.jp/~kamiyaf18

目 次

‘08春の植樹祭に奇蹟
神谷輝幸 1
2
3
3
4
4
5
5
6
6
6
7
環境キーワード 9
小谷野錦子
森を再生する会 10
お知らせ

08春の植樹祭に奇跡

神谷輝幸

今年の春の植樹祭は5月25日、段戸山水源の森で行われました。当日は朝からかなりの雨。前日から植樹祭はこんな天気だけれどやりますか、という問い合わせが多数寄せられました。足場の悪いことを考えると少し迷うところですが、食事やバスの手配等準備を進め、後戻りできない部分もありましたので、少雨決行と腹を決めていました。

決行することに迷いがなくなったのは、会員の一人の言葉「雨で木々は喜んでいますよ！」でした。私たちは、人間中心に物事を考え判断することが当たり前になっていますが、自然の側に立って物事を考えること、自然と共生するためには人間も少しは我慢することが大切であること、そのことが人間をたくましくさせること、などあらためて気づかされました。

集合場所の歴史博物館には、雨の中を参加者が続々と集まり、バスも満席になりました。心配だった参加者数も予定を上回って120名でした。この熱い思いが天に届いたのか、10時30分の開会式には、奇跡的にぴたりと雨が上がってしまいました。本当に不思議です。

この日は、植樹祭のほかに「流域住民を結ぶ交流施設･方丈庵」の披露を行うことができました。安城市の3つのライオンズクラブ（安城ライオンズクラブ、安城南ライオンズクラブ、安城中央ライオンズクラブ）の助成金をもとに、大工棟梁杉浦良和さんの指導の下、会員の働きにより出来上がったものです。植樹の後の昼食はこの方丈庵に備えた炉で炭火による五平餅が振舞われ、参加者に大いに喜んでいただけました。炉には段戸山産出の珪石が敷かれています。そこからは身体によい熱線が放出しているといわれます。今後この方丈庵が人と人とを結ぶ施設として大いに利用され、会員の皆さんが自然に親しみ、健康で元気に過ごしてもらえることを願っています。

毎回のことですが、植樹祭を迎えるまでの準備が大変です。毎月の定例活動日だけでは準備ができません。今回も、5月3日、4日と宿泊で準備作業を行いました。これも楽しい思い出でした。いつもは車運転のためアルコールは飲めませんが、この日ばかりは宿泊のためビールで乾杯、楽しい懇親会となりました。2軒の別荘の住民である伊藤先生、近藤さんとも親しくなりました。両家とも別荘を解放してくださり、交流できました。伊藤先生はシチューを作って持ってきてくれました。心の広い優しい人たちです。

ふるさとの木を植えることは森を守り、水を作り、海を豊かにし、地球を守ることつながりますが、毎回、活動を通して、よい人との出会いがあり、そのことが夢と希望である、そんな植樹祭でした。

神谷輝幸会長

安城ライオンズクラブ会長

感謝状を受けトラrた安城ライオンズクラブ会長

08春の植樹祭が新聞に載りました！！

毎日新聞　三河版

平成20年5月26日

中日新聞　西三河版

平成20年5月29日

段戸山の植生　野村　幸示

NPO森を再生する会の「春の植樹祭」に参加いただきありがとうございました。大自然の力でおいしい水を作る事の出来る山、自然災害の起こらない山を私たちの子孫に残せるよう頑張って活動しております。

山の木々は5月か7月の雨が多く降るようになると、水分を大量に吸い上げ急激に成長します。1年で30cmから40cmも先端の幹が上に伸び上がりどんどん太くなっていきます。2年前に植えた木々は腰か胸ぐらいまでしかない細い苗でしたが、日当りの良い条件の良い場所では、もう親指程の太さに成長し私たちの身長を超えてしまいました。この会も5年目に入り総数8千本以上の苗を植てきたわけですからさぞすごい山になっているかと思われますが、私たちの伐採している樹木は高さが30mから40m、太さは20cmから40cmもあり、それらから比べればまだまだ生まれたての赤ちゃんの苗たちです。

3月の初活動日は、昨年切り開いた草1本生えていない山肌に、いろいろな草木が芽生え、わらび、ぜんまい、ふきのとうとか、なにがしか食べられそうな草木が我先に生えてきます。バラ科の草もたくさん出てきて、気をつけないと手足に傷を付けてしまいます。珍しい名も知らない可憐な花も咲き出します。山の人に聞いた所「幽霊草」の一種だそうです。7月になればこのバラ科の草に赤やら黄色の実がなります。

昨年は山の植生調査を7月に行いました、専門家の指導のもと段戸山の在来種の調査を行いましたが、この赤色・黄色・黒色のバライチゴ、木いちごの熟している所で摘み放題、食べ放題で本来の目的とは別に楽しんでしまいました。大変瑞々しくおいしい観察会になってしまいました。まじめに行っている人には大変申し訳なく思いましたが、木の種類が多すぎて良く分からない私たち数名は大満足の半日でした。この報告を書くにあたり辞書で調べ詳しく報告しようと思いましたが、あまりにその種類が多く、「バライチゴ」なのか「木イチゴ」なのか「くさイチゴ」なのかも特定できませんでした。鋭いとげがあり、胸程の高さまで育っていて、赤色・黄色・黒色の実がついていましたのでバラ科のバライチゴだと思います。

今までに5510本の苗木を植えました！

年度別植樹本数　NPO法人　森を再生する会

	樹　種	04春	04秋	05春	05秋	06春	06秋	07春	07秋	08春	計
1	ヤマザクラ						90	300		30	
2	クリ	7	50		120	20	60	20		20	
3	コハウチワカエデ	28	100	40	120	20	60	20			
4	コミネカエデ		50		60	20	20	20		20	
5	イタヤカエデ								100	20	
6	アカガシ	46	50			30	90	30		20	
7	コナラ						60	20		20	
8	カツラ						60	30			
9	ミズキ	46	50	40	60		20	30		20	
10	トチノキ	15	50	30	60		20	30		20	
11	カシワ							20			
12	ブナ	46	100	40	240	20	60		150		
13	ミズナラ	46	100	40	300	30	90		100		
14	ホオノキ	16	50	30	120	20	60			20	
15	ウワミズザクラ		50	40	60	20	20				
16	ウラジロガシ					30	90				
17	アラカシ					20	60				
18	ツクバネガシ					20	60				
19	シラカシ					20	90			10	
20	ヤブニッケイ					10	30				
21	アオキ										
22	シキミ					10	30				
23	サカキ					10	30				
24	ミズメ		100	40	60		20				
25	アカシデ		100	40	90		30				
26	キハダ		50	20	60		20				
27	アオハダ				60		20			10	
28	ユズリハ						20				
	合　計	250	900	360	1,410	300	1,210	520	350	210	5,510

春の植樹祭
流域住民でつくる水源の森づくり事業

春の植樹祭

森を再生すること、
生涯をかけて最も価値ある仕事の一つ
安城学園高等学校校長　坂田成夫

今回の植樹祭の目的地は本校の開田高原彩雲ロッジ周辺でした。霊峰御嶽山の中腹１４００Mの場所にある本校ロッジは20年ほど前に建てられ、本校生徒の宿泊・合宿研修地として利用されてきました。周辺は人工林のからまつ林ですが伐採や下草刈りの手入れが不足していて、最近倒木が目立ち、森の荒廃が目立ち、気になっていました。5年前から新入生の研修メニューに下草刈りを入れ、「足助きこり塾代表」稲垣さんと「段戸炭焼き塾」の斉藤さんを講師に迎え、山の手入れに着手しました。5年間で１/１０ほどの森が手入れされ、その部分は今では広葉樹の小さな木が無数に生え、よい森になりつつあります。

9月23日・24日に第1次下草刈り・伐採、そして植樹祭当日の下草刈り、伐採でまた、広葉樹の森が一部分回復しました。今回初めて手入れをした部分の地面や木々が呼吸し始める気配を感じました。初めての体験でした。手入れした部分は10年ほど経過すると広葉樹とからまつ林が混在した素晴らしい森になっていくだろうと思います。

また、今回ブナ・ミズナラ・カエデの苗木を植林しましたがこの木々の成長も楽しみです。春の新緑・秋の紅葉の光景を思い浮かべただけでワクワクしてきます。

いつ開田高原で次回の植樹祭が開催されるかは未定ですが今回手入れをした森が毎年どんな風景に変化していくかは機会をみて報告していきたいと考えています。また、宿泊施設・温泉設備も完備した場所ですのでまた皆さんに利用していただきたいと考えています。

私の心の中では「森を再生すること」、それが生涯をかけて最も価値ある仕事の一つになっています。

(写真　七福酒造　黒柳)

近日中に坂田先生の」新しい文章に取り替える予定です。

渡辺一二三様原稿

来る予定

モルドバで炭焼きを教えました！

斎藤和彦

番　組　名：世界のこどもがSOS（マチャアキJAPAN２）

朝日放送（ABC）テレビ朝日系の全国放送（愛知県は名古屋TV）

放送日時　：平成20年3月28日(金)　PM8:00からPM10:00

企画趣旨　：紛争・貧困･疫病．．．世界には、生きるために苦難を強いられている子供たちがたくさんいます。

そんな世界の子供たちからのSOSに答えるべく、日本の高度成長時代以降を支え、定年を迎えた五十代、六十代のお父さんたちを“仕事人”としてエントリー。世界各国に派遣する番組です。

団塊の世代を代表する彼らは、リタイアしても、体力も気力もまだまだ現役。人生で培ってきた古き良き知恵や技術も十分社会で通用するのである。反面、その技術が、今の日本ではなかなか活かされていないと言う現実も・・・。

そんな元気で知恵のある仕事人たちが、自分の持つ技術をフル活用して,世界の子供たちを救う。

世界のこどもの笑顔を取り戻すため・・・**行け！マチャアキJAPAN！**

こんな企画に炭づくりと森づくりをテーマにエントリーされた私は、二週間ほど炭の文化のない東欧の貧しい小国･モルドバ共和国に派遣されました。ルーマニアの北側に位置する寒いモルドバ国の人口1700人ほどのゲトロヴァ村がその活動の拠点でした。

中世の頃より森に囲まれ家畜とともに平和に暮らしてきたなだらかな平地の多いこの国は、「長引くソ連の支配下でほとんどの森を伐採、農業国としてコルホーズ型経営を強いられましたが共産圏の崩壊と共に自由主義社会に復帰しました。しかし地下資源を持たない貧しい国のため、暖は年収の半分を割くと言われる高価な薪を大切に使用しておりました。肥料や農薬の入手はままならず農地は荒れ、主産品の葡萄畑だけが延々と続いておりました。

電気、ガス、水道、道路等のインフラ整備は極端に遅れ、子供たちの学ぶ学校の施設は明治中期頃の我が国のような有様でした。この村で私は、唯一打ち捨てられた葡萄の剪定枝を炭に焼いて炭団を作り使用することと、炭や灰を利用した森作りの大切さを教えてきました。

学校の先生や国有林の管理者たちに地球の至るところで森づくりが行われている現状を話し、京都議定書の意義を説いて来ましたが、時間に迫られ心残りでした。

とくに「冬になっても薪を沢山買えず、寒さに震えております」とSOSを遠い日本に発した10歳(5年生)の少女リナには父親がいなく、母親は遠いチェコスロバキアに出稼ぎに出かけていますので、祖父母と幼い妹と従姉妹の五人で肩寄せあって暮らしておりました。祖父母の年金が年額七万円。いくら始末をしても薪代は一年に五万円位かかるそうです。

リナは可愛く賢い少女でしたが腎臓病を患っておりました。そんなリナと一緒に広大な葡萄畑の中を歩きました。泥だらけになって奮闘しましたが炭焼くことぐらいしか出来ない私には、結果、たいしたことは何もしてあげることが出来ませんでした。

せめてこの後も遠い日本で炭を焼きながら、地球環境を守ろうと言う志しを抱き続けることで、彼の地の子供たちの笑顔に応えたいと念願しつつ帰国の途に着きました。

この度の二時間の放映で前半部分に私が出ます。是非ご覧頂き、時代遅れな山男の展開する段戸の山熾しを今後ともご支援下さいますようお願い申し上げます。

平成20年3月10日
三河炭やき塾　斎藤和彦

愚公が取り憑かれた夢

貧しい村と貧弱な校舎、しかし子供たちの瞳は明るく澄んでいた。ゲドロヴァ村の若き村長は学校に図書室を作ってやりたいと抱負を語られた。しかし願えどもなかなか国の予算が付かないとも嘆かれた。若き女性校長は子供たちに本を読ませたいとつぶやかれた。校舎の一角に、二十年ほど前から図書室に予定しているという荒れたその部屋が放置されてあった。
私はその学校で子供たちと二週間炭焼きをした。

愚公には東欧の貧しき小国、モルドバの支援は無力すぎる。しかしながらせめてあの少女の学ぶ小学校の図書室再建のお手伝いがしたい。請われてはモルドバの体験を話し、訪れる人たちに支援を呼びかけている。

友人の紹介でラオスに図書館を寄贈する運動に参加したという名古屋の女性を知ることができた。
あの企画に通訳として同行されたルーマニア人の女性とディレクターのＯ君が結ばれると便りがあった。この二人にも相談しよう。
製作に携わった関係者達も出来る便宜は計ろうと言ってくれた。
三河の過疎山で破衣をまといながら真っ黒になって炭焼く愚公はこの夢にむかって眼を怒らせております。
ご支援をお願いいたします。

平成20年盛夏　炭焼き愚公

住いから環境を考える　１．敷地

NPO法人幸せな家庭環境をつくる会　安城支部

大工　杉浦良和

まず、環境って何ですか？　わたくし達HSG（ホーミースタディグループ）〔住環境研究グループ〕はDNAをもつ全ての生物を支配するエネルギー〔力〕を持っているものと結論づけています。

住まいにあったては、其のプランの良し悪しで住む人の心と身体に影響をおよぼします。そこで今回住む所〔敷地〕についての環境ですが、わたくし達人間は地球上のどこでも住んでいます。東京の下町からアルプスの標高２~３０００mまで自然とともに安心平和な幸せな家庭を作り上げています。最近の敷地の構えですが、フェンスで囲い門扉にテレビ付きインターホン　何か変ですね。

町内の小学校も同じく最近できた学校のグランドまで、フェンスに門扉。まるでイスラエルと隣の？パレスチナ　鎖国を楽しんでいるみたい。（おれの国だれも入る事まかりならない。）テレビ付きインターホンで「何の御用でお出で下さいました？」（ばっかみたい）

次に玄関について。世界中で特異な入り口。昭和２５年より大学の先生方のプランと考えますが・・。その昔一般の住まいは土間入り口に縁端、腰を掛けお茶を頂くことができ、靴を脱がずに会話ができましたね。間取りプランについては、次の機会によろしければ取り上げてください。玄関と敷地は隣に環境の影響を与えます。だんだんと遠くなります〔近隣関係〕。意見をお持ちの方々のFAXをお待ちしています。

草苅　吉秀

ホーミー安城住まい教室　Tel:０５６６-７６-６５８２　Fax:０５６６-７６-６５７０

毎日新聞記事

イエイ　ログハウスダ！

方丈庵の棟上げ　写真神谷

恒例の2008年植樹祭に参加して　　八田 健一郎

５月の植樹祭は、前日来の雨降りが心配される中 で始まりを迎えました。
早朝は雨が残っており、降りが酷くならなければ良 いと心の中で祈るように豊田市内の自宅から植樹会場の段戸山麓・斎藤さんの森に向かいました。
その日の写真にもあるように植樹区域に登る時は カッパ姿の皆さんも多くいらっしゃいました。しかし、その後は大した雨も 降らず怪我も無く無事に苗木を植えられました。みなさんの気持ちが正に天に通じたような一日でした。
これまでの植樹も不思議と雨に妨げられる事はなかったようです。2003年この森を再生する会が発足し、2004年１月に残雪の中間伐が始まりました。４月に春の植樹祭、秋は前夜祭も催しての植樹祭と安城市民のみなさまの熱意に惹かれてこれまで楽しく取組んで来られました。体験者は良くご存知のように植樹の現場はかなり急峻な山の斜面です。準備から植樹当日までを含めて、大きな事故や怪我も無く天候にも恵まれてここまで来られたのは本当に参加したみなさまの努力の賜物です。これからも、これまで以上に安全には配慮すると共に更に楽しく、混交林への転換を促す植樹を続けて多様性のある生き生きとした森の再生をみなさんと 進めたいと思います。
私は、自称・トヨタ環境友の会のメンバでは数少ない現役会社員としてまだ勤めております。このメンバと共に斎藤さんの炭やきのお手伝いやロマン溢れるお話しを伺う内に、この森を再生する会にも加 えていただき、充実した人生を歩みつつあるという実感があります。単に会 社勤めや自分の趣味の世界だけでは知り得ない人々とのお話しや共同作業
を通じて、学ぶものがいろいろとあり、豊かさを感じます。
まるで、目指している豊かな森が広がるようです。この気持ちを現在の勤めの業務にも活かして持続可能な世界に通じるモノつくりに取組みたいと思います。
kenhatta@quartz.ocn.ne.jp

身近な環境問題から取り組む

愛知教育大学4学　鵜飼　健弘

僕は、NPO「森を再生する会」の植樹祭に初めて参加しました。そもそも、ボランティア活動というものに参加するのは今回が初めてだったので、一体どういうものなのか、どういった人が参加しているのか、わからないことばかりでとても緊張しながら植樹祭に参加しました。当日はあいにくの雨だったのですが、参加している人たちは、とても元気で、そのパワーに若い僕も圧倒されました。「水源の森」に着くと、雨も止んで、急な斜面を登って苗を植えました。普段コンクリートの上を不自由なく歩いている僕にとって、急な斜面を登るのはとてもきつかったです。しかし、みんなで協力して苗を植えたときの達成感はとても気持ちのいいもので、疲れも吹っ飛びました。
>
> この植樹祭に参加するまでは、環境について考えたことはありましたが、考えるだけで行動に移すということをしていませんでした。今回初めて、行動に移すことができました。やはり、世間で騒がれる環境問題は温暖化などの、大規模な問題が多いと思います。しかし、きれいでおいしい水を飲むことができないということも立派な環境問題だと僕は思います。地球規模の環境問題を考えて、取り組むことも大事ですが、今回の植樹祭に参加して身近な環境問題について考えて改善できるよう行動することも大切だと感じました。

化石燃料の使用による地球のバランスの崩壊

元東邦大学理学部大学院教授　大森禎子

近年は、世界中で異常現象が発生している。気温の上昇、極地の氷の溶解、台風の大型化と数の増加、海中のサンゴの死滅。これらは化石燃料の燃焼で発生する二酸化炭素(CO_2)の増加による温暖化が原因と言われる。さらに、発生するCO_2の量に比例して硫黄酸化物が発生し、世界中の樹木が枯れている。

サンゴと樹木はCO_2 を吸収して成長するので、CO_2削減には最も他のエネルギーを必要としない。CO_2の増加は、化石燃料の燃焼ばかりではなく、安価で手軽に大量生産ができる生活用品が石油から合成され、廃棄後、焼却処分されて発生するCO_2も加算される。昔の生活用品は全て天然素材で、薪や炭、家、家財道具、はき物、木綿の衣類等の最終処分で発生するCO_2は、自身が吸収したCO_2を排出するので、地球上のCO_2の割合が変化しない。

硫黄酸化物は、濃度がゼロでない限り、風で移動し、付着した場所で水分のみ蒸発し100%その場に残り、濃縮と蓄積を繰り返して濃度が高くなる。樹木は、昔から共存していた土壌成分や風送塩化ナトリウム等は、必要量のみを吸収してその割合は変化しない。しかし、近年の土壌の酸性化で増加した硝酸イオンや硫酸イオン、それによる溶解性硫酸アルミニウムや鉄は水と吸収される。吸収された金属硫酸塩は成長に必須のリン酸と結合して樹木の生長を妨害する。海岸近くでは風送塩化ナトリウムと二酸化マンガンの混合物に硫酸が加わり塩素を発生し、同時に潮解性の硫酸マンガンの生成で硫酸イオンが流出し、非海塩硫酸イオンの測定値にはその量は含まれず、マツ枯れは虫とされる。

村高の大楠　　草苅吉秀

年輪幅が急激に減少したところを数えると、同じ条件の地区ではほぼ同じ年数で、群馬県富士見村付近のアカマツは19年から22年、相模原市津久井町では36年、秋田県男鹿半島では34年前から徐々に衰退し立ち枯れたと考えられる。自然崩壊の対策は早めに実行しない限り取り返しは付かない。二酸化炭素の削減と同様、硫黄酸化物の削減も世界的にする必要がある。

新刊紹介　宮脇　昭先生

『森は地球のたからもの』！

子供たちにぜひ読んでいただきたい3冊です。宮脇先生のいつもの熱心な言葉が各ページに溢れています。森を再生することが自然災害を防ぎ、地球温暖化防止に役立つことが、よく分かります。森再生の解説書でもありますので、読書会や勉強会にも役立ちます。小中学校の図書室、地域の図書館にぜひ備えてください。

“『森は地球のたからもの１　森が泣いている』宮脇昭　著、ゆまに書房（2007年）

“本物の森”がつぎつぎ消えている。森を焼きはらうことで人間は自然を征服した。エジプトのピラミッドは緑の中にそびえていた。帰化植物のおそろしさを知っておこう。一度破壊された自然を取り戻すたいへんさ。「死んだ材料」発展してきた日本。ヘビとカエルのふしぎな関係。森が災害をふせいでくれる。地球温暖化と森の深い関係。命を守る本物の森を作ろう。

『森は地球のたからもの２　命の源』宮脇昭著、ゆまに書房（2008年）

日本人は森とどうかかわってきたか。宗教が日本の森を守ってきた。　日本の森の大破壊はいつはじまったのか。　人間は森によって生かされている。森は命の源となっている。　緑は人間に危機を知らせる番人。ヨーロッパの森はどのように破壊されたか。　森や半自然牧野の再生に熱心な国・オランダ。森は魚までも守っている。1000年続く、鎮守の森をつくろう。

『森は地球のたからもの３　森の未来』宮脇昭　著、ゆまに書房（2008年）

森は、最高・最強のフィルター。鎮守の森は、日本人の心のふるさと。本物の森をつくる方法を知っておこう。森づくりに欠かせない、潜在自然植生とは？　ドングリから森づくりをはじめよう。自分でも植生図をつくってみよう。　本物の森づくりが、さかんになっている。森をつくることが、地球温暖化防止の最善の方法。

環境を考える　キーワード解説

４．　温暖化防止洞爺湖サミット

自然災害発生のニュースが続いています。今年に入って6ヶ月の間にも、ミャンマーの巨大サイクロン、四川巨大地震、日本でも昨年の柏崎大地震の惨禍が癒えないうちに、また、岩手宮城内陸地震が発生しました。被災し避難所で暮らす人々には、梅雨の大雨が追い討ちをかけました。家族の安全、水、食糧、住まい、仕事、子ども達、私と同じような高齢者達・・・これからの生活はどうなるでしょうか。日本の地震被災者達の姿は、世界各地にいる地球温暖化の被害者達の姿と重なって見えます。

洞爺湖サミット：2008年7月７日～９日　北海道洞爺湖サミットが（主要8カ国首脳会議（G8）：日本、米国、イギリス、ドイツ、イタリヤ、カナダ、フランス、ロシア）が行なわれました。サミット期間中には、アフリカの7カ国首脳を含めた拡大会合と、新興５カ国（中国、インド、南アフリカ、メキシコ、ブラジル）と韓国、濠州、インドネシアが加わった主要排出国会議（１６カ国）が開かれたので、厳戒態勢の中で史上最大の首脳会合となりました。テーマは、世界経済・金融不安、環境･気候変動、開発・アフリカ、大量破壊兵器不拡散等、緊急課題が山積でした。サミットの主催国日本は、今回は特に地球温暖化防止で主導権を握り、世界全体で2050年までに50％温室効果がス（二酸化炭素他）を削減することを目標に会議に臨みました。

温室効果ガス削減目標（IPCCの報告から）：地球温暖化によって引き起こされた甚大な災害の現状や、その原因は、人類が化石燃料を大量に消費してきたことであること、その解決にはともかく二酸化炭素排出を減らさなければならないことなどについては、世界各国政府はほぼ同じ認識を持つようになり、IPCC（気候変動に関する政府間パネル）の科学的証拠を受け入れたといえます。（一部で異論が出回っています。）

前号で取り上げましたIPCCですが、2007年に出した第４次評価報告書では、次のように警告しています。

「大気中の二酸化炭素量を産業革命時代の濃度の2倍で安定化させ、平均気温を２度未満の上昇に抑えなければ、人類の生存の基盤が危うくなる。それゆえ、今後10年から15年の間に世界全体の温室効果ガスの排出量を減少に転じさせる。そして削減し排出量を2050年までに2000年比で半分以下としなければならない。特に先進国は、全世界に先行して2020年までに90年比で25から40%までに削減することが必要である。」前回のG8ダボス会議では、次回には数値目標を入れようという合意ができていました。

新興国と日米の主張激突－そして目標数値が消えた：以前から、温室効果ガスの削減の取り組みについては、どの国が、どれだけ（量）いつまでに（時期）削減するかについて、国によって意見が大きく違いました。温暖化の南北問題といわれますが、温暖化で甚大な被害を受けている国々（太平洋上の島嶼諸国、アフリカ、バングラデッシュ他）は、温室効果ガスを排出していない一方で、アメリカのように2億8千万の人口を抱え昨年まで、世界最大の二酸化炭素排出国でありながら、京都議定書で決めた削減枠組に参加しない国もあります。さらに、経済発展の途上にある中国は人口13億、経済成長率11.9%で、いまや世界最大の排出国となりましたし、同じくインドは人口10億2千7百万で、GDPが9.6%で、両国はもともと京都議定書の枠組に入っていません。米国が、中国とインドなどの新興国を組み入れた枠組で削減に取り組むことを主張したため、洞爺湖サミットではＧ８と同時に主要排出会議（MEM：16カ国）を開催する運びとなりました。

日本政府／福田首相が提案していたクールアース推進構想では、2050年までに50%削減を提案していましたが、はじめから中間時点での削減目標を立てることができませんでした。しかし、中国･インドは「先進国が、これから20～30年の間に率先して排出量を85～90%削減すべきである」と厳しく主張しました。これに対しては米国、日本が反対でした。新興国の大反対にあって、結局G8サミット宣言に用意された「世界全体の排出量を2050年までに半減させる」という文言は、「主要8カ国（G8）は『2050年までの温室効果ガス排出量の半減』との世界全体の長期目標をすべての国に求める。」という文言に書き換えられました。要するに、今回のサミットでは削減の数値目標は、決まりませんでしたが、世界全体で削減を目指して進もうという合意ができたということです。これでは残念ながら、二酸化炭素の削減はIPCCの提言のようには進みません。

低炭素社会へ仕組みを変えよう！：　現在、頭の痛い経済問題の一つである原油価格の高騰について、サミットは有効な手を打つことはできませんでした。価格の高騰は止まず、ほとんどすべての業種に悪い影響を及ぼしています。工業、漁業、農業、畜産業の生産者は、生産コストの上昇を消費者に価格を転嫁できず、追い詰められていますし、一方、賃金や年金は増加しないので、私達の暮らしが苦しくなりました。生産者も消費者も資源とエネルギーを節約しようと努力しています。省資源・省エネルギーの暮らし（エコライフ）は、お金を節約する暮らし、すなわち、経済的（エコノミー）な暮らしに通じます。『エコ』が共通です。

さらに近年、エネルギー源を石油や石炭に依存する社会から、地球上に無限に降り注ぐ太陽エネルギーのような再生可能なエネルギーを利用する社会に、変えていこうとする動きが活発になってきました。再生可能エネルギーには、太陽光、太陽熱、風力、地熱、潮力、水力、木材、バイオマスなどがあります。皆様よくご存知のように森林を管理して利用すれば、二酸化炭素は排出ゼロになります。これらの再生エネルギーを使う社会を低炭素社会とよびます。この中に放射性物質を使った原子力発電は入りません。

二酸化炭素削減・日本の進む道：日本政府は、いまの産業分野の枠組の中で、各分野で技術革新によってエネルギー効率を向上させる方法を提案しています。この方法は、セクター別アプローチと呼ばれていますが、産業界の自主的取り組みに期待する方法です。しかし、この方法では、京都議定書の削減率－６％を達成できませんでした。例えば、燃費の良い車に乗り換えても、車の台数が増えれば、二酸化炭素の総排出量は減らないわけです。国や地方行政は、自家用車から電車やバス、自転車、徒歩に替える仕組みも作らなければなりません。日本政府は、石油依存のエネルギーから、再生可能エネルギーを使う社会（低炭素社会）への転換の舵取りをしなければなりません。

御問い合わせは：
西尾事務所：　Tel 0563-54-1018　Fax0563-54-1021　（事務局長　榊原和久）、
携帯 090-8556-0503　Eメール：emtown2002@ybb.ne.jp
安城事務所：　Tel 080-3648-4942　Fax0566-99-1393（理事長　神谷輝幸）

ご参加下さい

森を再生する会は、緑のダム作りー流域住民でつくる水源の森ーを目指します。
活動は設楽町田峰西川の山林で行っています。

平成20年の活動

・総会：（会の活動報告と活動計画の討論）平成19年4月
・春の植樹祭：平成19年5月
・秋の植樹祭：平成19年１０月14日、開田高原でおこなわれました。
・定例活動日：毎月第４日曜日（会員が現地で針葉樹の間伐、間伐材の処理、広葉樹を植える土地の整備、すでに植えた若木の手入れ、植樹祭の準備、方丈庵の建設）
方丈庵の建設（今年度からいよいよ始まりました。）
・研修会、懇親会
・会報の発行（会員皆様の投稿をお待ちしています）

森を再生する会に入りませんか！

・会費　年額2,000円、他に山を購入する資金10,000円を広く募集しています。
森の中で働くと、森林再生の技術を学ぶことができますし、元気を取り戻します。

方丈庵の棟上げ　写真神谷

小谷野錦子

今回、テレビ、新聞などのマスメディアも二酸化炭素削減のためのキャンペーンを進めました。教育機関は環境教育を進めていますので、環境問題を理解し環境保全活動に参加する子ども達と若者が増えました。大変うれしいことです。国、地方自治体、企業、市民、学生、子ども達、NGOも一体となってこの難問を解決しようではありませんか。

体験できた“ Think globally, act locally ”

愛知教育大学社会専攻4年　長尾　彰彦

私はNPOというものに今まで参加したことがなかったので、どのように活動をしているのか大変気になっていました。『木を植える』という活動をしたのは初めての経験で、できるのか心配していましたが、作業自体はとても簡単で楽しかった。私自身、山がとても好きなので、清々しい気持ちで作業することができました。

今回の活動を通して、参加されている方々の森を再生させたい、自然を取り戻したいという気持ちがいたるところで感じられました。参加している方々の話に耳を傾けると、「こんな自然が増えたらいいわね」とか「山は食べ物から水まで何でもそろってるから」など、自然を本当に大切に思い、自然が好きなんだと感じさせてくれました。

今日、世の中は環境問題の話で持ちきりです。しかしながら本当に環境を憂慮して生活している人がどれくらいいるのでしょうか。日本は非常に環境問題を感じづらい国であるように思います。ある程度の都会にいれば、大雨の時に山崩れを体感することなんてまずないし、大気に関しでても、車社会が一般化しており汚い空気の中にいることに何の疑問も不快感も抱きません。

確かに環境問題を世界規模で考えることはとても重要です。だがそれよりも先に、身の回りの環境は『普通ではない』ことに気付かなければなりません。「Think globally, act locally.(地球規模で考え、足元から行動しよう)」という言葉があるように、まずは身の回りの環境問題に取り組む必要があるでしょう。今回の森を再生する会を通して私はそのことを体感できたように思います。美しい地球を未来の子どもたちに残すことは大人の責任です。今回植樹した苗木が立派に成長してくれるか、とても楽しみです。